

## 平林初之輔とその時代 (3)

——プロレタリア文学論への道——

渡 辺 和 靖

Kazuyasu WATANABE

(哲学教室)

### は じ め に — 方法論的考察

G・リヒトハイムは、その『ヨーロッパ文明1900 — 1970 I』(1972, 塚本明子訳・昭和54年・みすず書房)において、第一次世界大戦前後に生じた「世界像」の変化について、スチュアート・ヒューズの『意識と社会』をふまえながら叙述したのち、この変化の生じた根拠について、次のように論じている。

一九一〇年前後に建築、音楽、絵画に——そしてそれほどでもないがある程度まで文学に——おこったことは、新しい生活様式を誘因とする諸挑戦に対する一つの応答であった。この新しい生活様式そのものは第二次産業革命、機械文明の一般的な受容、そしてもっと安定した社会秩序に根ざしていた情緒的確かさの喪失、といったものによって形成されている。(109頁)

ここで指摘されている「機械文明の一般的な受容」「安定した社会秩序に根ざしていた情緒的確かさの喪失」という二つの現象は、近代文明が必然的に経過しなければならなかったものであり、西洋近代を受容するところに成立した日本の近代においても、様々な変容をこうむりながらも、当然生起せざるをえなかったはずである。

飛鳥井雅道は、『近代文化と社会主義』(昭和45年、晶文社)所収の「日本帝国主義思想の成立」において、既に日露戦争前後の時期について次のように指摘している。

特に古いとされる農民の意識にしばってみても、古い型の農民に天皇制思想の基盤をもとめるのでは、のちのちの天皇制の強さを証明できないと思われる。明治三〇年代以来、農村には非常に大きな変化がおこっていたことは確認できる。現在までこの時期についての研究が数少なく、論証にくい点はあるが、有名な山県有朋の「大地主はもはや農村の名望家にあらず」といった発言、および、明治後半活発になる地方改良運動をみても、権力の不安はたしかめられ、さらに、この時期を社会学的にあつかったほとんど唯一の福武直氏の労作『日本農村社会の構造』をみても、古い地主と新しい地主とが交代してゆく過程は、はっきり写しだされるのであった。(68頁)

この指摘によって、飛鳥井氏は、「天皇制の思想を、あまりにも封建性一色にぬりつづした」これまでの研究を批判し、日本の近代社会の変質を十分見すえた上で、それに対応する権力の思想の構造を、その「強みと弱み」をあわせて十全に把握することを要求しているのである。

岡義武は、「日露戦争後における新しい世代の成長——明治三八～大正三年」（『思想』昭和42年）において、「日露戦争の終結から第一次世界戦争勃発にいたるまでの約九年間をみると、とくに青年層の間において「個」の意識がそれ以前に比して一段と著しい発展を示している」と指摘し、「その反面の結果として、国家的忠誠心の減退あるいは国家への無関心の傾向を成長させた」と述べている。

旧来の「立身出世」という考えの場合には、本来的には、それにより家名を世に挙げ、郷党の誉れを飾るといふとき動機をとめない、且つ通常一般には国家の権力機構において高い地位を獲得することが意図されていた。しかし、「立身出世」という語の意味内容は次第に変化し、ついでこれと並んで用いられるようになった「成功」という言葉とともに、それらは家門、郷里とは離れた自己一身に関する事柄として考えられるようになり、且つその内容としても富の獲得（致富）を意味することが多くなった。（『思想』512号、1～2頁）

岡氏は、このような傾向が、一方において「自然主義文学」として展開したと同時に、「社会主義思想」もその一環として見ることができると論じている。さらに、このような傾向の生じた「原因」として、「日露戦争における勝利」とともに、次のように指摘している。

第二には、日露戦争を契機として産業革命が、従って、資本主義社会への編成替が大きく進展するにいたったことである。すなわち、戦後における「個」の意識の進展は、資本主義的文明およびイデオロギーの拡大、浸透と密接に関連する。（141頁）

このような傾向が、一つの現実的な力として歴史の舞台に登場するのは、岡氏も指摘するように、「大正デモクラシー」においてであった。「産業革命」と「資本主義的文明」の影響力は、明治をつうじて進展していたにしても、それが思想のレベルで顕在化するのは大正期に入ってからであった。

神島二郎は、「近代日本における中間層の形成過程——慾望ナチュラリズムの問題をめぐって」（『思想』昭和33年）において、大正期を中心として、従来の「献身の道徳」が「慾望ナチュラリズム」へと「暗転」していく経過を描写している。

神島氏は、明治末期における竹越与三郎の「家族組織、隣保団結の風は薄らいで来て、個人自ら己を鞭撻し、己を維持し、天涯万里の地までも、飄然として衣食を求めねばならぬ時勢となって来た」という発言をとりあげ、その背景にある「東京の発展」を指摘する。「そこには前代のような封建的拘束による保障はなく、出郷は奉公という信<sup>コンフォーミティ</sup>徒の培養ではなくなっていた」（『思想』404号、48頁）

総じて明治国家の国民統合は、一系家族および自然村に内在する反体制的エネルギーの組織化の道を断ち切り、個人単位・行政村単位に権力的把握を下降させ、はからずともこれらの“群化”を条件としてこれを成功させるが、（中略）その結果、もたらされるのは、「家」の崩壊であり、「村」の崩壊である。（48頁）

「近代日本の秩序原理は、基本的には自然村秩序のそれに基づくものである」にしても、このような事態に直面して、「この支えはある種の変容を余儀なくされる。秩序の頹廃と目される事態の発生は、その証拠であり、そこには少くとも在来のエトスが新たなものにかわる暗転があったと考えられる。」（53頁）それが、「慾望の自己目的化」としての「慾望ナチュラリズム」の成立であった。（55頁）

「慾望ナチュラリズム」は、「慾望にたいする正直という形で献身の道徳による規制をうけるにせよ」「そこには慾望のバランス以外に本来内在的な抑制の原理がない。」したがって、「その結果は、いずれにせよ、デカダンスに陥るか、さもなくば、これを避けるためにふたたび献身の道徳に復帰せざるをえない。」（『思想』405号、113頁）

自動化する欲望を収束するべき没入帰一の核を求めて彷徨し、アニミズム史観を媒介にし、「大勢」起動の主体への直覚に触発されて、「原理日本」、「デモクラシー」または「マルクス主義」（いずれも自己運動するものとして観念されていることに注意！）に自己を合体するものがあったとしても、それもけっして不思議ではない。（中略）献身対象の分散・集中の過程は明治も大正以後もまったくおなじであるが、そのつよさを決定した主体的契機は、まったくちがっており、前者においては武士的エトス（尚武的精神！）であり、後者においては欲望ナチュラリズムであることをわれわれはここで再確認しておかねばなるまい。（120頁）

以上考察した三氏の視野には、冒頭に引いたリヒトハイムの指摘と同様の問題意識が、はっきりと示されている。従来、日本の近代思想を取り扱う場合、体制一反体制、ファシズム－マルクス主義といった枠組みで捉えることが多かった。しかし、そのような視座では、権力の側も、そして変革を求める側もともに突き当らねばならなかった日本社会の根源的な変化は看過されてしまうであろう。飛鳥井氏や岡氏が指摘するように、権力の側もまた、日本社会の構造的変化に対応すべく模索せざるをえなかったのであり、神島氏が指摘するように、ファシズムもマルクス主義もともに日本社会に生じた新たな変化に対する応答に他ならなかったのである。

このような場合、体制・制度といった社会のいわばハードウェアにのみ焦点を合わせたのでは、事態を正しく把握することはできないだろう。「資本主義的文明」（岡義武）の浸透による「自然村」（神島二郎）の解体という歴史過程を思想の展開へと媒介する新しい視座の確立が要請される所以である。

ところで、ハンガリーの哲学者、アグネス・ヘラーは『個人と共同体』（良知力・小箕俊介訳、昭和51年、法政大学出版局）に訳出された論文「個人と共同体」において、次のように論じている。

共同体は構造化され組織化された集団統一体であって、同質的価値秩序を支配し、個人はかならずそこに所属しなければならない。かならず所属しなければならないというのは、「生まれながらそうであること」——それが個性の形成を助ける——によってか、すでに発展した個人の比較的自律的な選択によってである。（10頁）

共同体が「自然に与えられた共同体」であるかぎり、「あらゆる個人は、共同体のなかで個人に発展する。」しかし、やがて、「自然に与えられた共同体の解体段階」に入ると、個人と共同体との「調和」は破られ、ここに「選ばれた共同体がますます大きい役割をはたすようになる。」

「市民社会」の成立は、「自然に与えられた共同体を含めて、固定した価値秩序の解体をもたらした。」そこでは、個人が「価値を選択し、与えられた、多少とも幅をもった枠組みのなかで、自分自身の価値ヒエラルヒーそのものを構築する」。

市民社会においては、「人間は生まれながらに共同体のなかにはいりこんでいるのではない」。個人は「しばしば完全に共同体なしで生長し、またそうやって生涯を終わる」。

そこで、多くの人は「共同体のない生活」を理想と考えるに至る。

けれども、そうだからといって、市民社会の個人はかならず共同体をもたないというわけではない。反対なのである。ただ共同体にたいする個人の関係だけが変わるのである。すなわち個人が共同体に属するとすれば、それは発達した、自由にえられた共同体である。市民的革命家たち、平民は、つねにそうした共同体を作りだした。たとえばフランス革命において。労働者はただちに彼らの自立的な共同体的組織を築き始めた。この共同体の創出にあたっての目的は、搾取にたいするたたかいを成功裡に続けることであった。自己の階級意識にめざめ、共同体をつくり出してこの現存する階級を廃棄し、現存の秩序や価値秩序を新しいものにかえることができる労働者が、市民社会が個性の発達のなかで生みだしてきたものすべての代表者なのである。(19頁)

個人は、「自然に与えられた共同体」あるいは「自由にえられた共同体」のいずれかに「かならず所属しなければならない」というヘラーの指摘は、「資本主義的文明」の浸透によって「自然村」に基礎づけられた秩序が崩壊した大正期以降の日本の思想史を捉える視座を考える上で示唆的である。

伝統的な「自然に与えられた共同体」が崩壊していったとき、人々は、あらたに「自由にえられた共同体」を求めたはずである。それは、なにも、ことさらに社会の変革を求めた活動家たちを指しているのではなく、すべての人々が、伝統的な人間関係が切斷されたとき、新しい人と人の絆を求めたということである。

詩人萩原朔太郎は、大正六年(1917)、それまで書きためた詩篇を、『月に吠える』と題する詩集として出版するに当って、「序」において次のように述べている。

人間は一人一人にちがった肉体と、ちがった神経とをもつて居る。我のかなしみは彼のかなしみではない。彼のよろこびは我のよろこびではない。

人は一人一人では、いつも永久に、永久に、恐ろしい孤独である。(中略)

とはいへ、我々は決してぼつねんと切りはなされた宇宙の単位ではない。

我々の顔は、我々の皮膚は、一人一人にみんな異つて居る。けれども、実際は一人一人にみんな同一のところをもつて居るのである。この共通を人間同士の間に見るととき、自然間の『道徳』と『愛』とが生れるのである。そして我々はもはや永久に孤独ではない。(中略)

詩は神秘でも象徴でも鬼でもない。詩はただ、病める魂の所有者と孤独者との寂しいなぐさめである。

詩を思ふとき、私は人情のいぢらしさに自然と涙ぐましくなる。(『萩原朔太郎全集』第1巻、12～4頁、昭和50年、筑摩書房)

朔太郎は、すでに、「孤独」というものが人間の絶対条件であることを深く自覚している。しかし、同時に、彼は「孤独」のうちに安住しようとしているわけではない。彼は、「孤独」を通して、新しい人間関係を打ち建てようと激しく求めているのである。同じ詩集に収められた詩篇「さびしい人格」において、朔太郎は次のように歌っている。

さびしい人格が私の友を呼ぶ、

わが見知らぬ友よ、早くきたれ、

ここの古い椅子に腰をかけて、二人でしづかに話してゐよう、

なにも悲しむことなく、きみと私でしづかな幸福な日をくらさう、  
遠い公園のしづかな噴水の音をきいて居よう、  
しづかに、しづかに、二人でかうして抱き合つて居よう、  
母にも父にも兄弟にも遠くはなれて、  
母にも父にも知らない孤兒の心をむすび合はさう、  
ありとあらゆる人間の生活の中で、  
おまへと私だけの生活について話し合はう、  
まづしいたよりない、二人だけの秘密の生活について、  
ああ、その言葉は秋の落葉のやうに、そうそうとして膝の上にも散つてくるのではない  
か。（部分、69～70頁）

朔太郎は、ここで、新しい人間関係を求めている。「母にも父にも兄弟にも遠くはなれ」た、都会のかたすみの「公園」のベンチで、孤独な心をもった「孤兒」たちが、新しい関係を創造することを夢みているのだ。「自然に与えられた共同体」が解体した時点で、個人は、「自由にえらばれた共同体」を作りださねばならなかったのである。

「自然村」に基礎づけられた伝統的な秩序が崩壊した時点で、日本人は、個人と個人を結びつける新しい関係性を創出すべくせまられていたのだ。それこそが、大正昭和思想史を根拠づける根源的なモチーフであった。詩人朔太郎が、思想史の視野に入ってくるのもそこにおいてであり、日本のマルクス主義も、また、そのような課題と決して無縁ではないのである。

大正一一年、当時論壇に重きをなしていた阿部次郎の人格主義を、マルクス主義の立場から厳しく批判した少壮の哲学者竹内仁は、自ら心酔していた阿部の人格主義から、マルクス主義へと移行する過程において、次のように書きしるしている。大正一〇年八月六日の「日誌」を引く。

「愛」といふものがこれまでの自分の Grundprinzip であった。自分にとって、人類の理想は愛によつて人と人とが結ばれる社会の建設であつた。（中略）

今、自分はこの愛の原理の確実性を疑ふ。それは単に自分の sentimental な性情の甘さから生じた Phantasiebild に過ぎないのではないか。（『竹内仁遺稿』213～4頁・昭和3年、復刻版・昭和55年・湖北社）

つづいて、八月二九日の項。

何れ人は死なねばならぬ。労働者も資本家も、支配者も被支配者も。それを思ふと人は和げる丈和ぎたいと希はずにゐられない心持になる。それは阿部次郎氏の言ふ通りである。けれども、この心持のために、戦ふべき戦を中止していいものかどうか。中止しないまでも、その戦からその熱と力とを奪つていいものかどうか。（中略）

「人」としてのAを愛憎することと、「資本家」としてのAを憎むこととは区別せられねばならない。私は、Aの中の「資本家」を亡ぼさむことを欲する。出来得べくんば、「資本家」を亡ぼすことによつて彼の「人」を救ひたい。（中略） 目的は手段をjustifyするといふ Leninism の適用さるべきは正にかくの如き場合である。（227～8頁）

さらに、九月九日の項。

淋しさの中には、真実なるものを生み出す力がある。Einsamkeit は人をして、自分

自らと対峙せしめる。自分自らと対峙する時、人は善かれ悪かれ真実なる（若しくは真実なるに近き）自己を見出す。（230頁）

ここには、愛によって結ばれた共同体をストレートに求めるナイーブな心が、一度外的な力によって否定されて、深い「Einsamkeit」の中に沈潜することを通して、再び新しい人と人との共同性を求めた時、それに根拠を与えたものがマルクス主義であったという経緯が、たんに示されている。

伝統的な共同体の解体にともなって自立した個人が、その孤独をテコとして新しい人と人との結合の根拠を模索する——詩人萩原朔太郎とマルクス主義者竹内仁とを結ぶ共通のモチーフがここにある。このように、制度とか体制といったハードウェアではなく、人と人との結合という、社会のいわばソフトウェアに着目することによって、大正昭和思想史をトータルに捉える視座が開かれるように思われる。

### Ⅰ プロレタリア文学論の成立：大正10年3月

大正一二年（1923）一月、平林初之輔の最初の著書『無産階級の文化』が、早稲田泰文社から刊行された。二月二四日、平林が病気を養っていた千葉の市川で、出版を記念する「無産階級の文化の会」が開催され、『種蒔く人』同人の他、堺利彦、秋田雨雀、小川未明、前田河広一郎、藤森成吉、宮地嘉六等がかけつけた。

この『無産階級の文化』の出版こそ、平林が名実ともにプロレタリア文学運動の理論家の「第一人者」（青野季吉）であることを示すものであり、そこに収められた諸論稿は、平林自身、のちに「その理論の組み立てに、幾多の爽雜物が残存してゐたにもかゝらず、初期のプロレタリア文学運動に於ける比較的まとまつた理論として多少、人々の注意をひいたやうに思はれた。」（『プロレタリア文学運動の理論的及び実践的展開の過程』『社会科学』昭和3年4月、『平林初之輔文芸評論全集』——以下『全集』——中巻、688頁、昭和50年、文泉堂書店）と回顧しているように、また、小田切進によって、

素朴でしかも間違っていない、自己を大胆に歴史の客観的な立場にたたせ、おそれず発言している文章のハリといつてもいいし、運動全体に新しい方向を示すための情熱と責任感がこの文章にゆるがぬ確信めいたひびきを生じさせることになって、この提言をもとにして『種蒔く人』を中心とするプロレタリア文学運動の飛躍的な発展が作りだされたのだった。（『平林初之輔』『国文学 解釈と教材の研究』昭和36年7月、35頁）

と指摘されているように、プロレタリア文学運動における先駆的な役割をになっていることは、ここに十分承認されている。

しかし、大正九年におけるロマン主義の提唱から、どのような経路をたどってプロレタリア文学論へと至りついたかという問題については、これまで、必ずしも十分解明されていなかった。おそらく、それは、従来、プロレタリア文学論の前史としてではない、ロマン主義の独自の価値が十分認識されてこなかったことと対応している。

ロマン主義からプロレタリア文学論に至る経路を考える場合、「一九二一年三月」という日付のある「死の文学から生の文学へ」という発表誌未詳の論文は、重要な位置を占めているといえる。

『無産階級の文化』に収められた諸論稿は、「序」にあるように「大正十年と十一年と

の間に雑誌及び新聞へ発表したもの」であるが、その中でも、「死の文学から生の文学へ」は、もっとも早く発表されたものである。やはり「序」で、平林は、「私はこれを通読して、今更私自身がブルジョア観念の支配から脱しきつてゐないことを認めざるを得ぬ。特に執筆の日付の古いものほどそれが多い。」と述べているが、おそらく、この論文のうちに「小ブルジョア的思想の残滓」を認めつつも、自らのプロレタリア文学論の最初の出発点を確認して著書の中に収録したものであろう。

そこで、まず、この「死の文学から生の文学へ」を分析し、そこに見られる諸特質を析出することによって、それがロマン主義からどのように転化してきたかを明らかにする手がかりとしたい。

平林は、今日の文壇を論ずるためには、「その構成分子たる作家個人々々の優劣を論じたり」する以前に、「もう少し一般的の見地」から批判しなければならない、とする。なぜなら、作家は「自由意志」で作品を書くように見えるが、「彼等にとつて殆んど仕方のない問題が、そこに伏在してゐるのだ。吾々は吾々の意識から独立した社会条件の中に投げこまれるのだ。」

この点については、「社会主義経済学者が社会的不正義の責任を個人によりも社会組織に帰する意見を殆んどそのまま文壇にあてはめることが出来る」として、平林は、その具体例として、マルクスとソレルの言葉を挙げている。

かつて文壇でもてはやされた「人道主義」は、「凡てのものに涙を流す」ことによって「凡てのものをそのまま肯定」してしまった。凡庸な芸術家において、そのような態度はすべてを「ありのまゝに」写すという自然主義の描写論となり、人生観上の「無差別論」となり、結局、「現在を肯定し進化を阻むだけの取柄しかないのだ。」

「小説家の合言葉となつてゐる「ありのまゝ」といふ言葉は、批判と熱心と確信の欠如をおほふカムフラージュとなつてゐるやうな事実がなからうか。」もちろん、「社会がどれ程危機に瀕しやうと官能描写に専念してゐるのは作者の勝手だ。」しかし、

あだかも作者は人間を廃業したかのやうに、一ヶ月の血と汗の代償が五十円足らずで報ひられてゐる階級と、懐手して巨万の富を私してゐる階級とを包容してゐる社会の中で、手際が鮮かだとか、言葉が洗練されてゐるとかいふ、天下泰平の時代の閑で困る茶人によつて、何百回となくむし返された問題を、事新しく論じてゐることが、果して文人作家批評家の本来の仕事なのだらうか。

現在の社会においては、芸術作品は「商品」として取扱われる以外にない。従つて「作家の今日の社会組織内に於ける経済的關係は労働者と少しもかはりがないことになる。」それ故、こうした「根本的な問題」から眼をそらして、「芸術家のみの特権」を要求してみても、文学はよくなならないだろう。なぜなら、「他人のパンの略取によりて築かれた」今日の社会で「自由」や「幸福」を「謳歌するとき吾等の魂はブルジョアジイのためにむしばまれてゐる。」のである。

「吾等は吾等自身の幸福を人類全体の幸福以外に求めてはならない。」「貴い芸術」は「人類と共に不幸なる生活」から生まれる。そこには「尊い生きた反抗」がある。

「それには何からはじめたらいいか？ 集団生活を圧迫する権威に対する反抗だ。」「吾等が失つた生命をとりかへす唯一の道は反抗以外にない。而して反抗の手段は破壊だ。」「反抗と破壊とは新興階級の生命だ。そこから生れた芸術にこそ生命がある。」「新興階級

の反抗的、革命精神を呼吸することによりてのみ、死の文学は生の文学として甦る。」(『全集』上巻、50～9頁)

以上考察した平林の主張を、大正九年の段階におけるロマン主義と比較したとき、次の三つの特質を指摘することができる。

- ① 文学の階級的理解
- ② 人道主義の否定
- ③ 破壊としてのプロレタリア文学

ロマン主義においては、習慣と常識によってぬりかためられた「現実」を批判し否定するものとして、「真実」「理想」「人類」の力が強調されていた。「資本制度」の規制力が指摘され、現実への「反抗」が説かれるが、あくまでそれは認識のレベルにおいてである。反抗の根拠としてもちだされるのは、「人道の擁護」とか「人間の本性」といった普遍的価値に他ならない。平林にとって「文学革命」とは「致命的批評」のことに他ならなかった。

しかるに、ここに至って、「反抗」は「無産階級の運動」(57頁)に限定される。人間は「意識から独立した社会条件の中に投げこまれる」のであり、「資本家と労働者」が絶対的に対立する「資本制度」においては、いかなるものも「ブルジョアジイ」によって「むしばまれてゐる」のである。

このような「階級」概念を前提すれば、「人道」「人類」といった普遍的価値は、ほとんどその意味を失うだろう。階級対立という「根本的な問題」を抜きにして、「自由」や「幸福」を語ることは、「資本主義そのものを謳歌する」ことに他ならない。かくして人道主義の否定が導かれる。

さらに、平林は、ロマン主義の段階で、「現実」への反抗の方法として、「破壊」とともに「逃避」をも認めていた。「破壊」が、理想主義的な革命文学であるとすれば、「逃避」は、ポーやヴェルレーヌやワイルドなどのデカダンの詩人たちを指していた。

しかし、ここに至って、「習慣と偏見」から「脱するとは破壊することだ。しかし、破壊と逃避とは同じではない。破壊のためには対抗が先づ第一に必要だ。」として、「逃避」が放棄される。いわば、ロマン主義から「逃避」を引き去ったところにプロレタリア文学論が成立したということができよう。

しかしながら、そのような断絶のうちに、一つの内面的な連続性が内包していることを指摘しなければならない。それは、平林の人道主義批判が、「凡てのものをそのまゝに肯定する態度」に向けられていることである。これは、あきらかに、ロマン主義における自然主義批判のモチーフと同一である。「現実」を習慣と常識によってぬりかためられたものとする立場から、「現実」をブルジョアによって固定されたものとする立場への移行には、必然的な発展というべきものがある。

## Ⅱ 「階級」の発見：大正9年10月

さて、平林のロマン主義を代表する「反抗的精神と文芸」(『サンエス』)と同じ大正九年一〇月に『新潮』に発表された「現代文学の正体」は、階級の問題を真正面からとりあげたものとして注目される。

平林は、こんにちの文壇が、結局「現状維持の穴の中へもぐり込んでゐる」ことを批判



し次のように論ずる。

彼らは「一切のイズム」を否定する。「イズムは畢竟囚はれたものだといふ。」しかし、「主義をもたぬといふことが自由といふことと同じだと考へるのは此の上ない楽天思想である。主義のないといふことは立場がないといふことである。一定の見解がないといふことである。」

たしかに「文学は個人の精神の産物である」。しかし、「だから文学に普遍的価値なんていふものは無い。」とか「文学に一定した価値はない」というのは正しくない。

個人はめい／＼異つてはゐるが何れも人間であるといふ共通性をもつてゐる。この共通性に文学の普遍性が生ずる。文学が民衆に向ふのは、文学の墮落ではなくて文学の解放である。狭いサークルから脱して人間性につき進むことによつてそれは達し得られる。

平林が「階級」の問題に言及するのは、このすぐあとの部分である。日本の歴史を見ると、封建時代には「領主」に対する「犠牲的行為」が多かった、と前おきして、平林は次のように述べている。

「資本主義の時代が現出し、武士が退場して商人が登場する」と、「国家」や「領主」にかわつて、「金銭といふ偶像が光り出して来た。」「財産や資本が個人の愛欲生死をも支配するハイエスト・プリンスブルとなつて来た。」

しかるに、今や、歴史は新しい「回轉」をはじめつつある。「労働者が舞台へ躍り出した。」彼らの「偶像」は「領主」でも「金銭」でもない。「民衆の幸福そのものに他ならなかつた。」「民衆を愛するの余り民衆の敵であつた資本閥に対し憎惡の権化となつて物凄く荒れまはつてゐるのがロシアのボルシェヴィキではなからうか。（『全集』下巻、42～8頁）

ここには、ロシア革命に対する深甚なる関心がある。「ボルシェヴィキの正体」は「謎」であるというように、その正確な意味を十分理解するまでには至っていないとはいえ、平林は、そこで進行している事態に大きく心を動かされている。平林の「階級」への関心は、理論的な研究に導かれたというより、ロシア革命という現実によつてゐるといえる。

さらに、この論文の末尾で、「個人の愛慾ばかりが絶対のものであると信じてゐる人に対して私はこの驚くべき愛の進化の実例を示して指教を乞ふ次第である。」として、「労農ロシア」における「階級愛」を提起していることから知られるように、平林の「階級」に対する関心は、基本的には、個人の愛慾ばかりを描写し、社会への視野を放棄した、当時の自然主義文学への批判という、文学的なモチーフによつて導かれたものであった。つまり、平林は、ロシア革命によつて実現された社会主義に異常な関心を示し、文壇の閉塞状況を突破するなんらかの示唆をそこから読みとろうとしているのである。

同じ大正九年一〇月、『文章世界』の「文芸時評」において、平林は、「民衆作家として自ら許してゐる我国では珍らしい作家の一人」島田清治郎について述べた部分で、次のように発言している。

前号の本誌に第四階級の文学といふ面白い論文が出てゐたが、島田氏に対して第四階級の文学を期待してゐる私は失望せざるを得ないのである。貧民を描くことが民衆文学ではない。貧民に怒号させることも民衆文学ではない。民衆文学、第四階級の文学には根本的に新しい態度、見方が必要である。（中略）火のやうな反抗を直接社会に投

げたいならば小説よりももつと便利な形式がある。芸術に於て反抗を試むるならば徒らにはじめからしまひまで声を嗄らして絶叫する必要はない。(中略) 第四階級の文学は作中で社会に不平をならべることよりも、作全体が社会に対する致命的批評となるやうなものでなければならぬ。(『全集』下巻、458～9頁)

平林が挙げている「第四階級の文学」とは、『文章世界』大正九年九月号に掲載された中野秀人の評論である。これは、祖父江昭二が「大正九年になると、片上伸による「中間階級の文学」、中野秀人の「第四階級の文学」などに見られるように、「民衆芸術論議」における「民衆」ということばにかわって、「階級」ということばが使われるようになってきた。」(『プロレタリア文学I』『岩波講座 日本文学史』13、6頁、昭和34年)と指摘するように、文学を「階級」と結びつけようとする先駆的な試みの一つであった。平林自身も、のちに同題の評論を執筆していることから知られるように、この中野の一文になんらかの示唆を受けたと考えられる。

さて、中野は、この中で、「第四階級」＝「労働者」という素朴な観念、そして「文学は全人類の精神の糧」という人道主義の立場ながらも、「社会組織」を「究明」することによって「反抗闘争の文学」を創造するという方向を提出している。(『現代文学論大系』4、14～7頁、昭和29年、河出書房)

そこには、「エンジンやベルトが騒音を立てて居る現代生活」をこそ描くべきであるとか、「反抗闘争の文学」とか、ロシア革命への関心など、平林と共通するモチーフが散見する。が、根本的なところで大きく乖離する部分がある。中野は、文学の方法として、自然主義と見まがうような、「客観的」態度、傍観的態度、「自己を凝視してぢつと考へる」ことなどを主張している。

これに対して平林は、中野の評論に言及した先の時評文の中で、例えば、小川未明について、「材料が未成品や生のまゝでごろ／＼してゐる。」「全体を一つのロマンに組み立てるコンストラクチヴの力が十分でない。」(456頁)と批判し、また、岡田三郎郎について、「作者の主観の反発力が実に弱い。」「たゞ主観に映するがまゝの自然や事件をまるで受動的に書きつけたゞけにとゞまる。」(460頁)と批判していることから知られるように、一貫して、主観の力、主観的構成力の重要性を説いていた。平林が「第四階級の文学」に要求していたものは、「社会に対する致命的批評」となる「根本的に新しい態度、見方」であった。

### Ⅲ 突破口を求めて：大正9年11・12月

翌一一月、『新潮』所載の文芸時評「一兵卒の立場から」において、平林が、「プロパガンダとしての文学」を主張するのも、同じモチーフによっている。

文芸上の作品はそれ自身が例外なくプロパガンダである。文芸作品は客観の主観化であるとも言へるが主観の客観化であるといった方が更に適切である。平易な言葉で言へば自我の発表である。自我のプロパガンダである。創作といふことは単なる記述ではなくて主張である。

ところが、世間では、「労働運動」や「社会主義的思想」を扱った作品に対して、「プロパガンダ」であると決めつけ、「現在の社会」をただただ「肯定」した作品であれば、こうした「冷笑的の非難」から免れる。「傾向小説を排し、テーマを排し、プロパガンダ

を排してあとに残るのはあつてもなくともいゝ現在肯定の妥協小説のみである。」

平林は、次に、社会主義同盟が成立し、三・四人の文壇人がそれに加入したことにふれて、「文学者も経済的生活を営んでゐる人間である限り、人間全体の運命に関する問題に除外例を要求する権利も義務もない」として、肯定的に評価している。

社会主義は「人間全体の幸福に関する問題である。」ところが、これを「芸術の自由、芸術家の特権」をふりまわして批判するものがある。「資本主義の立場から喰つてかゝるのなら五分々々の喧嘩である」が、「社会主義の問題に芸術の特権を以てのぞむのは文学者の恥さらしになるだけである。」社会主義への「攻撃」は、「最後には事実上資本主義擁護の立場に返つて来なければならぬ。」（『全集』下巻、48～51頁）

平林は、社会主義が「未来永劫絶対完全のもの」と信じているわけではない。まだまだ多くの欠陥があると考えている。また、労働文学や社会主義文学に、まだ「ろくな作品が出ていないこと」も十分承知している。しかし、それでも、そこには、主観の発現としての「主張」がある。こうした動きを、「プロパガンダ」の一語でおしつぶそうとする試みを、平林は許すことができなかった。芸術の自由という名のもとに現状維持をはかろうとするのは、結局、資本主義を擁護するものである、と平林は厳しく告発する。

かつて、現実を「習慣」と「常識」にぬりかためられたものとし、その否定を説いた平林が、今や、現実とは資本主義という「制度」に他ならないことを理解しつつある。自然主義に対する平林の攻撃は、「階級」の視座を獲得することによって、いよいよその鋭さを増していった。

ここでの平林の力点は、資本主義批判にあるのではなく、あくまでも文壇をとりまく自然主義的傾向への批判にある。同じ一月、『読売新聞』の「月評」で、平林は、「あるがまゝのものを肯定し、存在を絶対価値と見做すのが、現実主義者に共通の前提である」と規定し、「殆んど例外なく現実主義の圏内から出てゐない」「今日の文壇」に活力を与えるためには、「まるで別種の立場」に立たなければならない、「それは習慣から自分と世界とを解放することである。あるがまゝのものに価値をおかないで、あらねばならぬものに価値をもつてゆくことである。」と論じている。なぜなら、今日の文壇の衰弱は、「現実主義そのものが当然遭遇しなければならぬ末路」であり、「以而非現実主義を排して真正現実主義を徹底せしめよ」などという立場によってはとうてい救済することはできず、「破壊の為めのアナザー・キャンプ」から「攻撃」する必要があるからである。（『全集』下巻、467～9頁）

平林は、自然主義に対する自らの攻撃が、少しも真正面から受けとめられないことにいらだっている。「別種の立場」「アナザー・キャンプ」とくり返すのは、そのためであろう。そして、ここでは明確にされていないが、社会主義は、そのような「別種の立場」として選ばれたものであった。

同じ月の「吉田絃二郎論——文壇新人論」（『新潮』）は、「短いながらもこれが、今日までに書かれた最大の吉田絃二郎論」であり、その後の吉田評のモデルになったと評価されている。（嶋田厚「大正の感傷」『大正感情史』82頁、昭和54年、日本書籍）

平林は、吉田絃二郎の欠陥を、たんてきに、「彼はセンチメンタルな心をもちつゝ自然主義の道を歩いてゐる。」「此の矛盾は彼の小説にかなりフェータルな破綻を与へてゐる。」と指摘している。自然主義は、「フランスの自然主義文学と東洋趣味との混血児として生

れたもの」であり、吉田は「描写上に於いて我が国の自然主義者の創始した型を何等の躊躇なしに受け入れ」「此の描写上のマンネリズムの泥海の中へ両足を踏みこんでしまつてゐる。」

平林は、最後に、吉田に対して次のように勧告する。自然主義の「拘束」から脱して、「マンネリズムに堕した現文壇の批難や慣例を尻目に眺めて、センチメンタリズムを縦横に発揮して無邪気な婦女子の紅涙を絞らせるのも決して無意味ではない。沈滞しやうとする傾向をもつたものは単に動かしてやるだけでも意味がある。」(『全集』下巻、55～68頁)

平林は、自然主義に支配された文壇を動揺させるという理由から、大衆文学のすすめを説いている。これは、平林の社会主義への接近と矛盾するものではない。社会主義が「破壊」であり、大衆文学が「逃避」であるというちがいはあっても、自然主義に対するアンチテーゼという意味においては等価であったから。吉田絃二郎のその後の軌跡、そしてそのちの平林の大衆文学との深い関係を考えるならば、この勧告は予言的な響きをもっていたといえることができる。

時は、ちょうど「通俗小説」とか「大衆文学」が問題にされはじめる時期に当たっていた。平林が、それらに対して少しも偏見をもっていなかったことは、「通俗小説の文芸的位置」(大正10年1月『新潮』)から知られる。平林は、「あの人(有島武郎一引用者)が通俗だと言ふならいゝ意味で広く自由に首肯したい」とし、結局、あるのは「一つのいい文芸」だけだとしている。(『全集』下巻、498～9頁)

一二月、『中央文学』所載の「象牙の塔から貉の穴へ」は、自然主義の問題について、平林が原理的に論述したものである。

「近世科学が思想史上に及ぼした影響を一言でつくせば「方法論」の確立であると言へる。」と、冒頭平林は断言する。「方法論」は、「科学」という「限界」からのさばり出し、今や「哲学」はおろか「宗教芸術」にまでその猛威をふるっている。

「方法論万能」は、しかし、「人間の哲学的要求」を満足させない。「認識の可能」を証明するだけが哲学の任務ではないからである。「哲学の限界を明瞭にしたのはカント派の手柄とも言へるが、同時に「方法」の点で哲学が科学に降参したものだとも言へる。」しかし、芸術は「グイッセンシャフト」ではない。「元来方法よりも実質を、形式よりも精神を主んずる芸術が方法論に支配されてうまく治まつてゆく道理はない。」

自然主義は、「到底調和する見込のない方法論と芸術とを調和させやうとする絶望的努力」であった。たしかに自然主義は、「象牙の塔」に眠っていた文学を覚醒させるのには有効であった。しかし、文学は、「これに代る避難所」として「貉の穴」を発見した。これが、すなわち「現実主義」である。

これを打破するのが「当面の問題」である。「現実主義が情性以外に何等の力をもつてゐないことは既に fait accomplit である。」ところが、現実主義の「末派」は、その「外延」を無限に拡大し、「近頃では現実主義は触るゝ問題を悉く包容し、縄張りを無限に拡張していった。」「彼等」は、その「情性的リアリズム」のうちに、ドストエフスキーであれトルストイであれ、ストリンドベリイであれ「世界の文豪」たちを引きずりこむが、それは「現実主義の深化にあらずして浅化である。」現実主義＝自然主義を根本的に治療するには、これを「一思ひに放棄する」以外にはない。(『全集』下巻、69～74頁)

平林の、自然主義に対するいらだちが、ここでは、極限にまでおしつめられている感が

ある。どれほど切りさいなまれても直ちに原形へと復活するヒドラのように、どのように批判しようともすべてをとり込んでおさまるかえる自然主義に対して、平林は、どうしようもない閉塞感にさいなまれている。「革命の心理は悲痛である。」という、末尾に唐突におかれた一句は、そうした平林の閉塞感を象徴的に示している。

大正一〇年一月、『新潮』所載の「創世紀と進化論——将来の文学に就て」に記された次の一節も、同じ心情を反映している。

今日存在するものは悉くそれだけの存在理由はもつてゐるに相違ない。けれども、今日だけを標準にして明日を考へるのは間違ひである。（中略）単なる改良家と革命家との岐れるのは此の点に於てである。（中略）凡ての革命は「今日」を度外視したまるで新しいものから生ずる。（中略）今日の文壇が最も要求してゐるのは、此の種のレフオルミストではなくてレヴオリユーションネールだ。前者の百人よりも後者の一人が必要だ。換言すれば百人の所謂實際家より一人の詩人が必要だ。真理以外には何物にも囚はれない詩人が必要だ。（『全集』下巻、75～6頁）

#### IV 偶像から科学へ：大正10年1月～3月

「大正九年の文壇を評す」（大正9年12月『新潮』）において、平林は、文壇が「転換」しつつあるという事実を指摘した上で、しかし「これは、一般人の要求がこれ等作家をおき去りにして先へ進んだ為めであつて、文壇内部の勢力の消長ではなく文壇対社会の關係によつてゐるのである。」文壇自体は少しも「動かなかつた」と断じている。

ところが社会は多少動いた。一般人の頭に階級意識がかなり鮮明になつて来た。社会的良心をもつたものには、曖昧な妥協的態度は堪へられなくなつて来た。民衆の一人になるか民衆の敵となるか以外に、立場が許されなくなつた。利害のまるで反対する二つの階級に社会がわかれかゝつて来た。（中略）文学者自身は立場をきめねばならぬことになつて来た。此岸にたつか彼岸にたつかといふ一点で文学の将来は定まるのである。（『全集』下巻、481～8頁）

文壇が社会の動きからとり残されているというのは、はやくからの平林の確信であつたが、今や、文学者は決断をせまられている。二つの階級のいずれに属するのか？ 中間の立場はもはや許されない。

こうした状況に対する文学者の反応として二つの型がある、というのが「十一月の文壇」（大正9年12月『早稲田文学』）の主旨であつた。ここで平林は、片上伸と河上肇の二人をとりあげ、「社会主義と文化主義」（「今年から来年へ」『読売新聞』大正9年12月、『全集』下巻、497頁）の対照を鮮明に描いてみせた。

平林は、まず、片上伸の二つの論文「文芸教育の提唱」「文芸中心の文化事業」をとりあげ、次のように論じている。

片上は、「現在の教育」があまりに「実用的方面」にかたよっていることを批判し、「人間としての生活を全体的に、総合的に考へたり感じたり、味つたりすることの必要」を説いている。しかし、片上は、現代文明の由来する「根本的の欠陥」を明らかにしていない。

如何に控へ目に考へても現代の不安の底には組織と制度が横はつてゐることは否めない。如何に善良な資本家であつても資本家であるといふことそのことが既に到底労働者と利害をともにする能はざる地位にあるが如きはその一例である。

「文芸教育」が「豊富な、逞ましい生活の交響楽を奏せしめるところの一大綜合事業」であるとしても、現在、それが「混濁したどら声」を響かせているとしたら、その「混濁の源」をまずさぐらねばならない。「文学も政治も社会運動も一切の文化の権威要素の派生してゐる根元体にこそ現代の欠陥はひそんでゐるのである。」（『全集』下巻、488～90頁）

こうした平林の批判に対して、片上は、「文芸教育論」（『芸術自由教育』創刊号、大正10年1月）を書いて反駁している。

私は、制度組織の変革の重大な意義、価値、及至影響を理解し得ないものではない。しかしながら、その重大な制度組織の変革を真に実現するがためにも、一層根本的な力、即ち人間生活の真実な正しく美しく善なるものに感応して、これを愛し護らうとする心の源泉を、強く逞しく豊富にすることが、最も必要であることを信じて疑はないものである。（11頁）

片上のこうした対応を、一つの類型と捉え、平林はこれに河上肇を対置する。平林は、河上の「或日の問答」をとりあげる。これは、大正九年一一月の『我等』に掲載されたもので、河上はこれの中で、「苟くも資本主義的組織の下に生産されたものである以上、一として「絞取」の刻印のつかぬものはありません。」「どうしたとて、畢竟は、資本主義の害悪から超越し切れるものではありません。」（『河上肇全集』11、262頁、昭和58年、岩波書店）と述べている。平林は、これについて、片上と比較しながら、次のように「二種のタイプ」を総括している。

河上氏にとっては人間の幸福と不幸とを左右する主なるものは組織である。片上氏にとっては組織以上の綜合文化である。（中略）河上氏にとっては綜合文化の建設は二の次の問題であり、片上氏にとっては組織悪から脱られることよりも綜合文化の完成に貢献することが社会と人類との為めに有意義であるらしい。（『十一月の文壇』491頁）

片上の文化主義と河上の社会主義——現代に対するこの二つの処方箋のいずれに平林がより好意的であるかは、片上の「綜合文化の正体」は甚だ曖昧であるが、河上の「組織悪」は明確であり、それ故それから「脱する手段」も「絶望」的であるが「可能」であると平林が評価するとき、明瞭である。平林にとって、社会主義は、個人を越えた「組織と制度」のメカニズムを解明するものであったのである。

社会における「二つの階級」の対立、評論における「社会主義と文化主義」の対立、この妥協を許さない深刻な対立は、早晚、文学の上にも反映せずにはまい。『読売新聞』の文芸時評「今年から来年」（大正9年12月15日～17日）において、平林は次のように述べている。

多くの文学作品は、「手あたり次第の日常茶飯事をとつて来て、直ちに表現の一点で勝を一気に制しやうとする」もので、その「態度」は、「常識」を出ようとしていない。「今の日本全体が例の常識線上に整列してゐるのである。」

多くの人々は、「批評精神をもて」と叫ぶ。しかし、今必要なものは、「批評以上のもの」「批評を超越した偶像」だ。「此偶像の為に一切を無秩序と混乱の中に投ずることが必要だ。」

明治維新は皇室中心といふ批評以上の信仰のために成就した。フランス革命は自由、平等、博愛といふ絶対原理が民衆を奮起させた為になつた。無資産階級の経済的自由といふ批評以上のモットーが今日の社会運動の指導原理である。（『全集』下巻、493～

5 頁)

ここではじめて、平林は、文学評価の基準として、「批評」という内在原理にかえて、外から「無資産階級の経済的自由」という原理をもちだしてくる。この時点で、すでに、平林のプロレタリア文学論の原型が見られる。ただ、ここでは、社会主義が「科学」としてではなく、文壇の閉塞状況を打破するための「偶像」としてもちだされるのである。この段階では、平林は、「今日の文学を破壊する方法は実際わからぬ」として、社会主義の実践活動にコミットするだけの準備ができていない。しかし、「その方法は原稿紙に向つて材料をいくら捏ねまはしてみても駄目だ」（497 頁）ということだけは、平林にとっても明らかであった。

ちょうどこの文芸時評が執筆されたと考えられる12月10日、日本社会主義同盟が、東京神田の基督教青年会館で発会式をあげ、平林も、小牧近江、佐々木孝丸、尾崎士郎らとともに参加した。

さて、平林は、さきの引用につづけて、「将来の文学は民衆文学以外にあり得ない。」と断言する。

民衆文学を樹立する為めには今日の文学は全部邪道なのだから、全部破壊しなくてはならぬ。作者の思想も態度も表現法も技巧も一切をあげて熔炉にぶちこんで、ケーオスとデイスオーダーを現出しなければならぬ。今日文壇の人のすべき仕事は新しい何物かを生むことよりも古いものを破壊することの方が余程急務だ。（496 頁）

平林が、具体的に「民衆文学」を提唱するのは、これが最初である。このモチーフは、翌大正一〇年一月、三回にわたって『時事新報』に発表された「民衆芸術の二問題」にひきつがれる。

久しい間、「民衆は自己の運命を他から指定されてゐた。」しかるに、最近になって、民衆は「社会の表面へ躍り出して来た。」かくて、「各方面の特権階級」はしだいに否定され、「経済上の特権階級」のみが残され、いたるところで「此の階級と民衆との間に白兵戦が行はれてゐる。」このような時期に、「民衆文学」を確立するためには、「従来の歴史、伝統、制度、趣味」に「価値」をおく「現実主義」ではなく、「論理のさすところに従つて従来の存在を無視した新しい原理を樹立する」「ロマンチズム」「理想主義」「革命文学」をとらねばならない。（1月18日）

民衆文学にとって、「天才」は無縁のように見える。しかし、「サンデカリズムの鼻祖ソレル」は、「当面の問題は受動的な無道徳の多数を得ることよりも能動的な道徳の少数を得ることである。」といている。ソレルのいう「少数」とは、「民衆の欲求をもつて直観とする戦士」である。ここに、「天才の新しい意味」がある。（1月20日）

現在最も必要なものは「破壊力をもつた詩人」である。「現代文学の破壊は未来の文学の建設」である。「民衆の心にひそむ無意識の或るものを直観し得る人は常に小数である。」「是に於て民衆詩人（極めて広義の）の専制が許されるのである。」（1月22日）

大正一〇年二月、『新文学』の「時評」において、平林は次のように論じている。

「人間のつくつたものは人間全体の幸福或は文化の完成の為めには絶対性を主張する権利はない。此の意味に於て私は芸術の絶対性を否定する。」「社会的正義」が、芸術の上位に存在している。

「芸術批評の最高原理」がなんであるかについては、まだ「定説」がない。「芸術」に

は「法則」がなく、それ故に「演繹も帰納」も成立せず、結局これを「定義」することが不可能であるからである。だから、芸術については「各人各様の見解」が許されるわけであり、ここに「社会的正義」を「芸術批評の原理」とする根拠がある。しかも、芸術は「他の一切の人間の活動と同じく、広義に於ける人間の幸福を目的とする活動でなければならぬ」から、「社会正義は批評原理として積極的意義を帯び来るのである。」

内在的な立場からするかぎり、それぞれの人にそれぞれの見解が可能である。そのことを十分承認した上で、平林は、内在批評を一挙に越えるものとして「社会的正義」という原理を提示するのである。

平林はつづける。「科学としての歴史」は、なんらかの形で「事実」の「選択」を前提としている。だから、「選択の標準を明示するに非れば科学としての歴史は無意味である。」ところが、「従来の歴史」は「暗黙の裡に或る階級を標準として、その下積みとなつてゐる階級を忘却してゐた」。

これと同じく、「今日の文学」も「多年の習慣」から安易に「ブルジョアジーの思想」に基づいていた。「個人の意識の中に先づこのブルジョアジーに対するプロレタリアートの反逆が起らねばならないと私は考へる。これを教へるものは心理ではなくて論理である。」（『全集』下巻、78～81頁）

かつて、「偶像」としてもちだされた社会主義が、ここでは、「科学」として、「論理」として、「個人の意識」に発現すべきものとして提起される。現実には構成されたものであるとする平林の認識論を媒介として、現実には「習慣」と「常識」によってぬり固められたものとするロマン主義のモチーフが、ここに至って、現実を「ブルジョアジー」によって固定されたものとする社会主義の発想へと、みごとに発展しているのを見てとることができよう。

平林自身、そうしたモチーフの一貫性をはっきり自覚していた。大正一〇年三月、『早稲田文学』所載「時事偶感」に次の一節がある。

かつて私は所謂現実といふものが、如何に習慣によりて粉飾されて真理と遠ざかつてゐるものであるかを述べたことがある。現在の社会、現在の環境の間にある大多数の人々は現在に対する批判力を失つてゐるのである。物質的にも精神的にもさうである。それだから物質的には現在の肯定となり、精神的には自由批判の欠如となるのである。（『全集』下巻、83～4頁）

かくして、「一九二一年三月」の日付をもつ、「無産階級の運動」へのコミットを表明した、「死の文学から生の文学へ」が執筆されることになるのである。

（昭和58年8月30日受理）